

研究だより NO.41

平成22年度 研究の概要

発刊にあたって	1
研究主題	1
研究の構想・内容	2～3
教科等の研究実践	4～8
シャトル学習・総合学習	9～11
大学出前授業	12

香川大学教育学部附属坂出中学校

発刊 平成23年2月25日

発刊にあたって



学校長 柳井 修

春暖の候、皆様方におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

昨年は、中学校の教育においては、平成24年度、全面実施されます「新学習指導要領」の具現化に向けて、試行・研究の年であったように思います。私たち、附属坂出中学校におきましても、このような教育の流れの中で、過去の研究を振り返りながら、新たな時代の「学び」について模索した年でありました。

さて、本校は、昨年度平成21年度まで過去数回の文部科学省研究指定を受けながら、特に平成12年度以降は、連続4回の指定を受け、一貫して、基礎基本の習得と個性を生かす教育研究に取り組んでまいりました。昭和50年代からのモジュール学習はもちろんのこと、平成初期からは、「生涯学習」を見据えた研究をスタートさせ、「共通学習」「自由学習」「総合学習」を包括したカリキュラムを構築しました。その後「自己の内面」に視点をあてた研究を経ながら「学びの意味」を重視した研究へと発展しました。その間、「シャトル学習」に代表される学習集団や教材開発、指導法などの具体的な研究も深めながら、昨年6月の研究発表会でも公開しました「総合学習《CAN》」を出口とする、「『学ぶこと』と『生きること』の統合」をめざした教育研究に至っています。

本号では、これまでの成果に基づき、「学びの文脈づくり」を促進させ、質の高い「協同的な学び」の構築をめざした実践研究の概要を紹介しておりますので、忌憚のないご意見やご示唆を頂戴できれば幸いと存じます。

〔研究主題〕

「学ぶこと」と「生きること」の統合

— かかわり合う中で、自己の学びをつむぐ —

1 研究主題設定の経緯

平成に入って文部省（現文部科学省）が「新しい学力観」を打ち出し、学力観の見直しを推進する中、本校でもその流れをふまえながら、生涯にわたって学び続ける意欲やその基礎となる力の育成を中心に据えて実践研究を続けてきた。その中で、「総合的な学習の時間」の先駆的試みと言える「合科型自由学習」の開発など、数々の成果を上げてきた。平成16年度からは「『生きること』と『学ぶこと』の統合」をキーワードとして、教育活動全体を関連づけたカリキュラムの構築、「学びの意味化」を促す学習のあり方を追究している。

平成22年6月の教育研究発表会では、「学びの意味化」の実現に向けて、すべての授業において、学びの横軸である「協同的な学び」と、縦軸である「個の学びの文脈づくり」を有機的に関連づける授業構築、そしてそこでの教師のかかわり方を提案した。また、「総合学習」の新たな展開としての「総合学習CAN」を開発し、異学年合同の教科発展的学習である「シャトル学習」を、教科学習と「総合学習」をつなぐ（習得・活用と探究をつなぐ）学びの場として新たに位置付けることによって、カリキュラムを再構築した。

今期は、前回の研究を引き継ぎながら、「自己の学びを文脈としてとらえ、それを更新すること」をより一層重視するとともに、そのために欠かせない「協同的な学び」のあり方と教師のかかわりについて、日々の教育活動全体を通じてのよりよい対話状況の定着を基盤として、さらに追究していく。また、認知心理学の知見に基づく、個性に関する実践的基礎研究を推進し、新学習指導要領に対応したカリキュラムのさらなる整備についても研究を進めていく。

2 研究の構想

サブテーマに直接かかわる研究の柱は、以下の二つである。

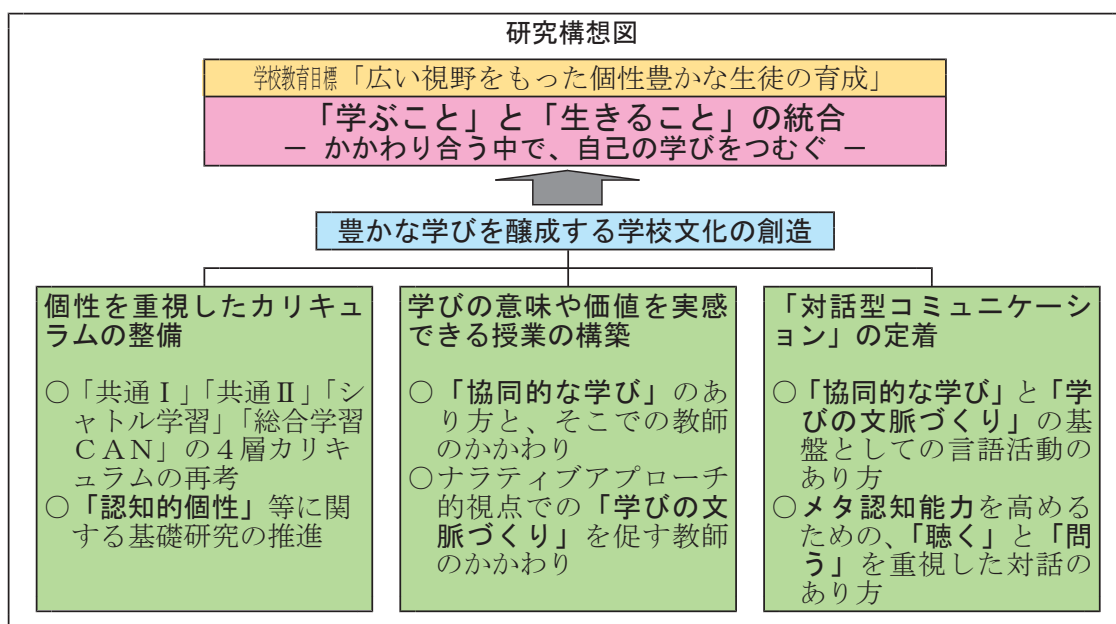
- 個と個をつなげ豊かな学びを築くための交流のあり方と、そこでの教師のかかわり方（協同的な学びの構築）
- ナラティブアプローチ的視点での学びの文脈づくりを促す、継続的・効果的かつ多様な教師のかかわり方（個の学びの再文脈化）

この二つについては、生徒同士あるいは生徒と教師とのコミュニケーションの基盤がどう築かれているかが大きなポイントとなる。そこで、学校生活でのコミュニケーションをさらに対話的なものにし（対話型コミュニケーションの定着）、一人一人の生徒にとってより意味のある学びを実現していくための研究を深めようとしている。研究授業でも、生徒同士や教師と生徒との対話状況の分析に力を注いでいる。

また、前回も研究の柱として取り組んだ「主体的に学び続ける生徒を育成するカリキュラム」「主体的な学びを促す学習環境」についても継続して研究を続け、『共通学習Ⅰ』『共通学習Ⅱ』『シャトル学習』『総合学習CAN』の4層カリキュラムの改善」「豊かな学びを醸成する学校文化の創造」として一層の充実を図る。

なお、「共通学習Ⅰ」「共通学習Ⅱ」「シャトル学習」「総合学習CAN」の4層カリキュラムについては、24年度から選択教科が必修でなくなるということをもふまえて、「シャトル学習」を「総合学習」の中に位置付けることに伴う変更が必要である。「シャトル学習」を『共通学習』と『総合学習』をつなぐもの」という位置付けから、「自己の学習特性を活かしながら『総合学習CAN』での研究の仕方を身に付ける場」という位置付けへとシフトしていくことになる。

さらに、今期からは一人一人の生徒に応じた学びの実現のために、生徒の「認知的個性」等に関する基礎研究にも力を注ぎ、理論的裏付けがあり、かつ実践的なカリキュラムの提案を目指し、より広い視点から「共通学習」「シャトル学習」「総合学習CAN」の関連性の強化に努める。



3 研究の内容

(1) 個性を重視したカリキュラムの整備

探究の方法を学ぶ場として「シャトル学習」の開発を進めてきたが、生徒へのアンケート調査からは、「シャトル学習」での学びが「総合学習CAN」に活かされたかどうかという点で教科によって生徒の意識に大きな開きがあった。そこで、現在、探究方法を学ぶ場であるということを中心に構想を立てている。その際、多種多様な探究方法の中から、自分の「学習特性」を活かした探究方法を学ぶことができるように、教師や生徒が「学習特性」を把握できるような方法を開発したいと考えている。物事を探究する道筋は幾通りもあるだろうが、生徒は其中で、自分に合った、あるいは必要を感じる探究方法を選択して、その力を高めながら学んでいくのである。

個性に着目した学びの関連性	
総合学習 CAN	「多様な個性」を活かした探究型自由学習
シャトル学習	「学習特性」に応じた探究法習得型選択学習
共通Ⅱ	「学習特性」を把握できる教科発展学習
共通Ⅰ	全員共通の教科基礎学習

なお、「学習特性」は「多様な個性」の一部に過ぎない。「総合学習CAN」では、「学習特性にとどまらない自分の「多様な個性」(認知的個性)を視野に入れて探究活動に取り組みせたいと考えている。

また、教科学習である「共通学習Ⅰ」と「共通学習Ⅱ」の区別について、「共通学習」「シャ

トル学習」「総合学習CAN」の関連性と連動させて再考し、整合性を高めたい。

(2) 学びの意味や価値を実感できる授業の構築

「学びの意味化」の実現に向けては、学びの横軸である「協同的な学び」と、縦軸である「個の学びの文脈づくり」を有機的に関連づける授業構築が必要であるとの認識は変わらない。これまでの研究実践によって、さまざまな試みによる成果も確認できている。次の段階として目指すのは、より多くの生徒が学びの意味や価値を実感できるようにすることである。生徒の学び手としての自立性を高めるとともに、教師のかかわり方がさらに追究されなければならない。グループ学習に関する実践研究は数多いが、本校では、アクションラーニングの手法を活かした協同的な学びと、ナラティブアプローチの考え方を援用した学びの文脈づくりによって、本校が目指す「学びの意味化」の実現に迫ろうと考えている。

(3) 「対話型コミュニケーション」の定着

高度情報化社会である現代社会の中で人間関係の希薄化が進み、コミュニケーション能力の育成が叫ばれて久しい。さらに昨今では、グローバル化の波の中で、各方面で対話の重要性が指摘されている。コミュニケーションの中でも、相互理解、建設的な話し合いを重視するという流れの中で「対話」という用語が多用されているのではないだろうか。これは本校で目指している「協同的な学び」や「学びの文脈づくり」とも関係が深いことであり、それらの基盤としてはたらく言語活動を「対話型コミュニケーション」と呼び、その定着に力を注ごうと考えている。

具体的には、生徒や教師の対話状況の分析を進め、本校が目指す「対話型コミュニケーション」の具体的な内容を整理し、全教育活動を視野に入れて、よりよい対話状況の実現を目指す。中でも「聴く」と「問う」を重視し、生徒のメタ認知能力を高める対話のあり方について追究していく。

(4) 豊かな学びを醸成する学校文化の創造

現在取り組んでいる、「情報・文化エリア」「教科エリア」「総合学習CANエリア」「あじさいホール（憩いの場）」などの、生徒の気づきを生み出す空間づくりをさらに推進するとともに、特別活動・道徳の時間等とのリンクを整理し、学びの場である中学校としての学習文化的風土の醸成に努める。

※1 ナラティブアプローチ＝ナラティブ（語り・物語）という概念を手がかりにしてある現象に迫る方法。医療や心理学などの臨床領域をはじめ、様々な研究分野で新たなアプローチの手法として注目されている。

※2 認知的個性（CI）＝関西大学の松村暢隆教授らが提唱する、さまざまな認知的な能力やスタイルなどの個人差を包括的に捉え直す個性の新たな概念。

※3 アクションラーニング＝グループで現実の問題を解決していく過程で生じる、行動とリフレクションを通じて、個人・グループの学習する力を養成するチーム学習法。質問とリフレクションが重要である。